れがそのまま斯学の将来を語るものではないかもしれない。とまれ，幅広い層と歴史の厚みとを有するこの国のオリエント学の未来を予言する資格は，筆者にはなさそうである。

もはや紙数もつきて，関連ある重要な出版書や飜訳書，各地の研究施設，諸大学の歴史や機構（カレル大学はボヘミア〔すなわちチェヒ Čechy〕の Karl 四世によって1348年に創立され，栄光と苦難の歴史を秘めた，中欧最古の大学である），前記諸学究がそれぞれの大学で所属している部局などに言及することもできなくなった。そこで最後に一言——以上の諸学府や研究所はもちろん，そのほか，たとえば他のプラハの大学をも含めると，ここで取扱うべき範囲には属しないが，インド学やシナ学，日本学などに，高名な巨匠の名が数々見い出される。そしてそれにつけても思うのは，わが日本の学界である。言霊のさきほうとか言われるこの国に，オリエント（西南アジア）のどの部門にも，それを擁する講座が，ほとんどの大学にないということは，かえりみてうらさびしい次第である。

本稿は，Otakar Klíma 博士の寄贈にかかる Dušan Zbavitel: Oriental Studies in Czechoslovakia, translated from the Czech by Iris Urwin, Prague 1959 に主としてよった。そのさい，チェコ語版をも求めたが，それは上梓されていないとのことであった。また本書に不足のところは，改めて同博士に指示を乞うた。文尾ではあるが記して深謝の意を表したい。

あ と が き

○本会発足以来会長職にある足利惇氏教授は本年五月還暦を迎えたが，引きつづき会の発展に余念がない。本誌が本号から従前のタイプ印刷を排して活字印刷となったのも，その慫慂と斡旋に基づくもの。よってこれを機に題号も同会長の染毫によることとした。

○クレッセントとサザン・クロスをモティーフにした扉の会章は足利会長の発想をうけて本誌編集部吉田光邦の構成作画したもの。

○集録された論文4篇，学界展望1篇はいずれも珠玉の好篇であることはいうまでもない。以後，本誌はこうした内容で，学術雑誌としての性格を明確にしてゆきたいと思う。研究論文，国内国外の学界動向など諸兄姉のご寄稿を心からお願いしたい。掲載の向には，別刷30部をさしあげる予定である。

○新着図書は本誌第四号以後累積の一途をたどり，本誌掲載の域をはるかに超えたので別方面に期待するほかはなくなった。また紙数の関係から「書評」を割愛したが，海外消息欄が「書評」中の紹介部門を一部担当しているとも思われるので，ご寛恕を願いたい。

○本号印刷については，めんどうな造活その他万般にわたり，あぽろん社の伊藤社主の並なみならぬご好意を仰いだ。特記して謝意を表したい。〔編集部記〕